

佐伯三十三観音巡り・蒲江

吉田 勝重

(会員 佐伯市女島)

平成二十一年度現地研修は「佐伯三十三観音巡り」と題し、蒲江・米水津・鶴見の三地区の観音様参りを計画した。第一回は三月十三日に実施された。あいにくの雨であったが五十五名の方が参加した。

「三十三観音」とは法華経普門品(観音経)に説く、現世利益のために応現する三十三身にちなんで考えられた観音様で、教典とは無関係に作り出されたもので教理的な根拠はない。

三十三身は仏身から執金剛神に至る多様な姿であるのに対し、三十三観音のほとんどは中国的な衣相の観音で、その名称も数尊を除いて中国式な発想や故事に基づいたものと思われるものが多い。

また、「三十三所観音」というのもある。

これは観世音菩薩の像を安置する三十三カ所の霊場の事で、三十三観音・三十三番札所とも言われる。

平安時代の末に畿内近傍に起こったが、巡礼が盛んになるにつれて各地に生じた。西国、板東、秩父の三十三観音が全国的に尊崇を得た。

三十三の数は、観音が衆生救済の爲に三十三身として現れるとの普門品の所説にもとづく。(国史大辞典より)

佐伯三十三観音は、享保十四年(1729)七月二十四日、養福寺三十四世観音上人(成松文書では観空快連上人)が開創したとなっている。

寺名(庵名)と本尊は以下のとおりである。

- | | | | | |
|----|-----|----------|----------|-------|
| 一番 | 鶴屋 | 東光山大日寺 | 真言宗 | 大日如来 |
| 二番 | 地松浦 | 浄迎寺 | 養福寺末庵 | 観世音菩薩 |
| 三番 | 沖松浦 | 吉祥寺 | 潮谷寺末庵 | 十一面観音 |
| 四番 | 日野浦 | 浄生庵 | 潮谷寺末庵 | 十一面観音 |
| 五番 | 羽出浦 | 福寿庵 | 潮谷寺末庵 | 十一面観音 |
| 六番 | 中越浦 | 西生庵 | 養福寺末庵 | 十一面観音 |
| 七番 | 竹野浦 | 潮月寺(釣月寺) | 釈迦如来・聖観音 | |

八番	浦白浦	普門院	養福寺末庵	十一面観音
九番	色利浦	妙智庵	潮月寺末庵	観世音菩薩
十番	宮ノ浦	迎松庵	養福寺末庵	薬師如来
十一番	畑野浦	清水庵	福泉寺末庵	阿弥陀如来
十二番	西野浦	長命庵	(長江寺)	魚籃観音
十三番	蒲江浦	積翠庵	江国寺末庵	聖観世音菩薩
十四番	丸市尾	慈眼院(廃庵)	(現・梅南寺)	聖観世音菩薩
十五番	竹角村	妙智庵		聖観音
十六番	西野	圓通庵		観世音菩薩
十七番	波越村	佛徳山常楽寺		十一面観音
十八番	泥谷村	妙香庵(妙光庵)		千手観音
十九番	柏江村	金剛山江國寺		不詳
廿番	城村	福壽山天徳寺		釈迦如来
廿一番	久部村	観音寺(廃寺)		釈迦如来
廿二番	羽明山	龍護寺		観世音菩薩
廿三番	下野村	正覚寺(正覚庵)		千手観音
				馬頭観音

廿四番	八戸村	養谷寺(養谷庵)	観世音菩薩
廿五番	切畑村	長松寺(洞明寺)	文殊菩薩
廿六番	上野村	如意輪堂(西連寺末庵)	廃庵
廿七番	床木村	智山妙高庵(仙床寺末庵)	廃庵
廿八番	夏井浦	千眼堂(千眼院)	千手観音菩薩
廿九番	鳩浦	浄土庵(立法寺?)	阿弥陀如来
卅番	落野浦	本教寺(本行寺)	阿弥陀如来
卅一番	日向泊	普戒院	潮谷寺末庵
卅二番	高松浦	大休庵	不詳
卅三番	鶴屋	三光院(養賢寺内廃庵)	不詳

この享保十四年の佐伯三十三観音は「佐伯聞書」に書かれていゝ。その後これらの寺院、庵は時代の流れと共に盛衰を繰り返して、現在に至るもの、廃庵・廃寺となるもの等がある。又、その後の佐伯西国三十三方所や佐伯八十八カ所として多くの参拝を受けたものもある。

今回の「佐伯三十三観音めぐり」で訪問したのは、蒲江町の三つのお寺である。
以下、訪問したお寺を紹介しよう。

第十一番札所
清せい水すい庵あん

詠歌 夜もすがら

音羽の瀧に響き来て

心の清水いかに澄むらん

第一の訪問地の清水庵は、佐伯市蒲江字畑野浦網代にあり、福泉寺末庵として延喜年間（901～923）に諸国



修行の高僧により建てられたといわれている。

音羽山清水庵と号し本尊は聖観音像である。

御堂は昭和四十九年（1974）に再建されたもので宝形造りである。庵の手前、左手のやや高い所には五輪塔と宝篋印塔群



がある。

この五輪塔や宝篋印塔は、慶長年間（この地に住んでいたという長曾我部元親一族の戸高氏が祀ったもの）と云われている。五輪塔の中には一石五輪塔もある。

長曾我部元親は土佐国（現一高知県）

に生まれ、四国一国を領有していた。

のち豊臣秀吉につかえ、豊薩戦争の際、大分戸次川原の戦いに参加、長男信親を戦死させている。

長曾我部氏の一族が蒲江地区に在住していたという話もある。この畑野浦地区をはじめ、蒲江地区には戸高姓を名乗る家が多い。

清水庵の手前の墓地にも戸高姓のものがあ、一つの墓

地には真新しい五輪塔が納められていた。

清水庵の境内はかなり広く、庵の後の山地には水量は乏しいが一つの瀧があった。

御詠歌に詠われている「音羽の瀧」であろうか……。庵主さんの話では、数年前までは冬に瀧につららが下がる事があったという。最近は温暖化のせいか全く見られないそうである。

裏山にかけては、多くの石像群が見られ、瀧の中腹には不動明王像が、手前には笠塔婆かさとうばがある。



この笠塔婆には、天和二年（1682）二月建立の銘があり、塔高二メートル五センチ、塔身は方柱状で四面に佛・菩薩像を配している。

佐伯地方にはその例を他に見られないという。



瀧周辺には、猿田彦大神や不動明王像等、多くの石像が見受けられた。音羽の瀧の高さは三十メートル以上ある。清水庵本尊は聖観音である。その左右に不動明王像（左）と薬師如来（右）が脇本尊の形で置かれていた。

観音信仰の基となる観音経は、もともとは独自の教典であったが、法華経の中に位置し、「妙法蓮華経第二十五、観



不動明王

清水菴の本尊
聖観世音菩薩

薬師如来

世音菩薩普門品」として独立したものである。

「法華経」は、西暦四百六年、中国の長安大寺においてクマラジーヴァ（鳩摩羅什）によって漢訳された。観世音菩薩は、「世間の音声を観するもの」という意味で観世音と名づけられたという。普門品以外の旧訳の経典の中にも「闍音」「光世音」「観自在」「観世自在」「観世音自在」との表現が見られる。

三十三観音の名称には楊柳観音・竜頭観音・持経観音・内光観音・遊戲観音・白衣観音・蓮臥観音・滝見観音・施薬観音・魚藍観音・徳王観音・水月観音・一葉観音・青頸観音・威徳観音・延命観音・衆宝観音・岩戸観音・能静観音・阿耨観音・阿應提観音・葉衣観音・瑠璃観音・多羅尊観音・蛤蜊観音・六時観音・普悲観音・馬郎婦観音・合掌観音・一如観音・不二観音・持連観音・灑水観音の名がある。

私たちは、次の訪問地である佐伯市蒲江大字西野浦字仲川原にある佐伯三十三所第十二番札所「長命庵」に向かった。

第十二番札所 長命庵

詠歌 罪重き身さへ誓ひに乘りの船

こがれて渡る西の浦波

二番目の訪問地は、佐伯市浦江大字西野浦字仲川原にある「長江寺」である。第十二番札所の長命庵は現在は無くなっていた。



長命庵は、臨濟宗妙心寺派に属する福泉寺の末庵であり、創建は宝永三年（1706）と古いものである。明治初期の畑野浦地区と西野浦地区の弥次郎貝裁判騒動にかかわり長命庵は福泉寺から分離し一つの庵と

して西野浦に存在する事になった。

この西野浦には明治年間に作られた佐伯市堅田の江國寺末庵の積翠菴（せきすいあん）＝臨濟宗妙心寺派）もあり、一つの地区に同じ宗派の二つの庵があるという形になっていた。

同じ地区に同じ宗派のお寺が二つあるということは、何かにつけて問題を醸し出していたという

そのため地区の人々が相談して一寺にするように決めたそうである。

その時の約定として二人の住職（長命庵・積翠庵）のうち、先に亡くなった住職の方が残された庵に合併する事にしてたと現住職の脇坂了鐵さんは話されていた。

この話は第四世了鐵住職の時の出来事である。

当時は長江寺が住職、積翠庵が副住職を務めていたという。昭和十七年三月両庵を合併して一寺とした。

現在の長江寺（旧積翠庵）の住職の脇坂さんがこの寺の住職を引き継ぎ現任に到っている。

現住職は第六世である。

現在の長江寺は住職が小学校二三年頃までは積翠庵と呼ばれていた。建物は昔の積翠庵の建物（明治に積翠庵と

して建てられ、寺格の高い「長江寺」の名前を残したとい
う。
御本尊は薬師如来（積翠庵 本尊）である。
寺を合併したため長命庵の御本尊、観世音菩薩もあり、本
殿の右に脇本尊として祀られている。



長江禪寺本堂



※脇本尊 観世音菩薩（旧 長命庵本尊）



※薬師如来（積翠寺本尊・現 長江禪寺本尊）

第十四番札所 慈眼院

哀れとや 見そなはずらん かけても

暗き心の のりのともし火

三番目の札所である第十四番札所、慈眼院は、佐伯市蒲江大字名護屋字丸市尾地区にあったが、現在は廃されている。

明治二十三年の寺院明細牒には東光寺の末庵として、波当津、葛原、野々河内、森崎、丸市尾、猪串、坪、河内の八カ所に庵があった事がわかっている。現在は住む人もなく瓦は落ち雑草に覆われている。

この名護屋地区には、明治二十五年（1892）に東光寺第十五世月真和尚を招いて、現在の地に伽藍を建立し開山始祖とした梅南寺がある。

明治三十五年隱齋を増設。明治三十七年二世謙崑和尚が京都より入寺した。

明治四十四年大鐘並びに鐘撞堂完成。

明治四十五年山門を建立する。

昭和六年第三世梅崑和尚普山式挙行、昭和三十五年第四世

香逸和尚就任、昭和四十年境内拡張のため山門を移動し墓地を移転する。昭和五十六年山門と太子堂新築、昭和六十年参道に石灯籠を建立、昭和六十三年庫裏新築、平成二年本堂と鐘楼を新築し落慶法要をする。



平成十三年法

輪香 逸和尚より法輪良真和尚に住職を交代。

現在に至る。

臨済宗南禅寺

派雄香山梅南寺

と稱する。

本尊は十一面

観世音菩薩である。



現本尊：聖観音像

現在、この地区にあるお寺は、この梅南寺だけである。名護屋地区の「浦の迫」には五輪塔が残っている。

江戸期より古いものもある。

また、葛原、波当津、名護屋地区には佐伯惟治（大神惟治）を祀った富尾神社がある。

名護屋地区の人々は、この地の宮司は山を越えてやって来ていたと言っている。

中世、浦の迫に旧地区があったようである。

蒲江浦から南の集落は、東光寺の門徒であった。

丸市尾の地区のみが明治に庵を造り寺格に昇格している。檀家は200軒ほどである。

享保十二年（1727）の佐伯三十三観音札所案内では、十四番札所として滋眼庵があり、本尊は十一面観音（秘仏）であった。梅南寺の本尊は聖観音である。



境内にある宝篋印塔

この梅南寺の境内には、宝篋印塔や太子堂がある。

この境内の宝篋印塔は形から新しいものと考えられている。

使用されている墓石が白御影石であれば江戸時代初期、肌色御影石であれば江戸中期元禄時代と考えられる。

このような石は、蒲江には産せず、廻船問屋などを通じて、瀬戸内海から運ばれたものといえる。

太子堂の横、本堂の裏手の墓地には石塔が見られた。梅南寺の横には木造の寶形造りの太子堂があった。



現在も、弘法大師信仰の大師講が行われている。

地区の人々からは、「おだいっさん」として慕われている。



「おだいっさん」として親しまれる太子堂の弘法大師像

蒲江地区の三十三観音巡りは、雨の中の研修であったが無事終了した。次回は米水津地区である。